

フランク・ロイド・ライトにおける窓の変容の意味の研究

氏名 水上 優^{※1}

概要 フランク・ロイド・ライトの住宅作品における窓の意味を問う研究である。ライトアーカイブズにおいて、作品の個性を担うアートガラスや打ち抜きパネルのデザインを収集し、データベースを作成した。また初期から後期への窓の変容の転換を担う作品を現地訪問調査した。これらを元に、論者のこれまでのライトの思想研究及び平面構成研究を引き寄せつつ、窓の意味の解釈を行なった。前期のアートガラスは内と外の区別を繋ぐものであったが、後期は部屋の窓から住宅の窓として人間が住まうことを自然（世界）と結びつける存在論的意味を獲得したとの解釈が提示された。

研究背景と目的

独自の有機的建築を志向する建築家フランク・ロイド・ライトにとって「窓」とはいったい何であったのだろうか。有機的建築とは、建築によって人間と自然との一体化を志向する建築であるといえる。窓は内と外の間であり内と外を関係付けるものであるから、かれにとってそれは人間と自然とを繋ぐものであり、そのデザインのあり方は有機的建築の根本的な主題に他ならない。

本研究の目的は、かれの窓のデザインを全般的に調査し、整理し、その多様性を明らかにするとともに、前期のステンドグラスの窓が後期のプレーングラスの窓に変容する事態の意味を、同時期のかれの言説を引き寄せつつ、住宅の全体構成の内で考察することである。

本研究の背景には、論者によるこれまでのライトの建築思想研究及び住宅平面構成

の研究がある。思想研究では、ライトの残した膨大な言葉のうちでかれの建築思想のキーワード(有機的、内、命、素材の本性など)の連関を考察し、その建築思想の構造化を行った(図1)。現在は、建築思想研究において読み取られたかれの建築思想の転回を、言葉ではなく建築作品から跡づけようとしている。これまでの住宅の平面図の構成の分析により、プレイリー・ハウスにおいては、空間の連続性と一体性の観点から8つの型が指摘され、その多様性を生み出すシステムが明らかにされた(図2)。一方ユースニアン・ハウスでは基本的に型は1つしかないが、100件を超す作品の多様性はプレイリー・ハウス以上である。

本研究は、空間現象の基盤としての「平面構成の変容の研究」に対して、より直接的な空間現象の契機としての「デザインの変容の研究」として位置付けられる。

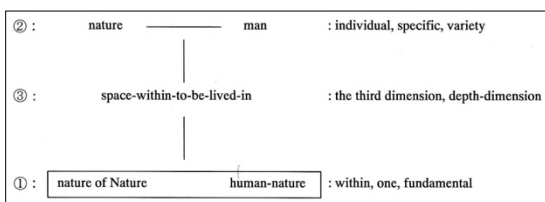


図1 ライトの建築観の構造

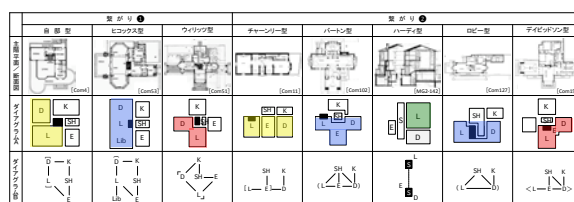


図2 プレイリー・ハウスの8つの型

※1 兵庫県立大学 教授

【様式 2】

研究成果と考察

今回、ライト・アーカイヴズに収蔵されている全住宅作品について、窓の観点から、資料の悉皆的な調査を行い窓デザインのデータベースを作成した。これを踏まえ、以下、かれの窓の変容を分析したい。

プレイリー・ハウスの窓

初期プレイリー・ハウスの窓は、そのアートガラス（ライト・スクリーン）の素晴らしさで知られる。最初期の窓デザインは単純な菱形や、増築されたオークパーク自邸食堂（1895）の窓に見られるような、単純な図形を反復させたものであった。色ガラスを用いて直線によって構成される独特なアートガラスが窓として住宅全体に一体的に展開されたのは、ヘラー邸（1896）辺りからである。以後プレイリー・ハウスでは、その1つ1つの建物に固有のアートガラスがデザインされる。ブラッドリー邸（1900）のように平面ガラスを縁取るようなデザインのものや、リトル第2邸（1912）のように複数のアートガラスが連続する構成もあった。

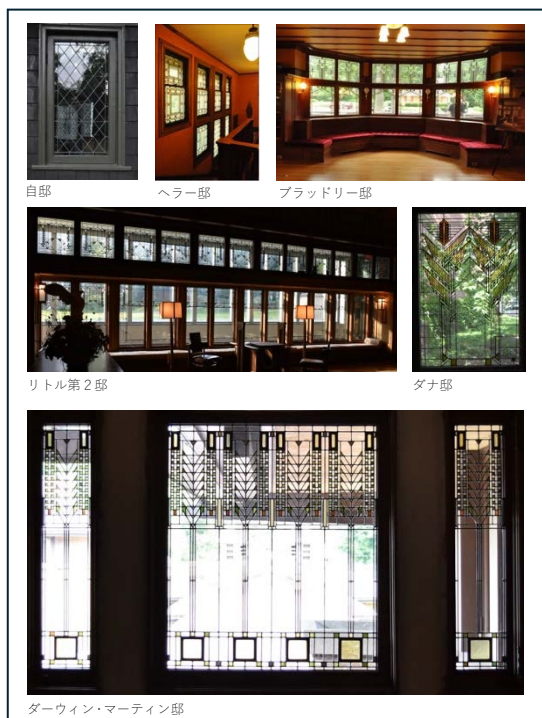


図3 プレイリー・ハウスの窓

多くは幾何学的に構成された抽象的なデザインであったが、ダナ邸（1902）の「漆の木」のようにモチーフが明示されるものや、D. マーティン邸（1904）の「生命の木」やターンリー・プレイハウス（1912）の「子供達のシンフォニー」のように、特別に名付けられたものもあった。

建物へのアートガラス導入は当時の流行であったが、同時代のステンドグラス作家ジョン・ラ・ファージやL.C. ティファニーのそれが基本的に全て色ガラスであったのに対して、ライトのものは透明ガラスが主であった。すなわち、ライトは窓において、外の景色とアートガラスのデザインが重なることを意図していたのである。

コンクリートブロック住宅の窓

いわゆる「第1黄金時代」の後、彼は西海岸に4件のコンクリートブロック・ハウスをデザインしているが、このうちアートガラスを用いるのはエニス邸のみであり、またこれが「ライト・スクリーン」の最後の作品となった。コンクリートブロック住宅に登場した特徴的な窓のデザインとして2点が指摘される。1つはデザインされたブロックに穴が穿たれガラスが嵌められたものであり、もう1つは、フリーマン邸における、方立なしで直角方向に突き合わされた板ガラスによるコーナーウィンドウである。前者は採光窓として、後のユーソニアン・ハウスの打ち抜きパネルにも繋がる。後者は



図4 フリーマン邸の窓

住宅の隅部を解放するデザインとして、「箱の解体」のコンセプトを表現している。

1929 年のリチャード・ロイド・ジョーンズ邸は、ライトの全作品の中でも特異な存在であるが、今回、現地調査を実施した。

コンクリートブロックを縦に積んだ柱と同寸法のガラスを縦に並べた開口部が交互に連続して住宅の内外の境界を形成し、窓、柱、壁の区別が曖昧である。ガラス壁だけで凸状に外部に迫り出す部分が 3 箇所あり、内側の一部が植栽される。居間のテラス側は高天井で高窓をもつランタン・ルームがあり、天井の低いソファを介してテラスと繋がる。テラスは居間とほぼ同面積で深い底をもち、庭に連続する。この住宅における試行錯誤は、「内と外」の関係、あり方が、改めて主題化されていることを示している。



図 5 リチャード・ロイド・ジョーンズ邸

ユーソニアン・ハウスの窓

上述フリーマン邸のコーナーウィンドウはウィリー邸 (1933) で決定的な変容を遂げる。すなわちキッチンと寝室のコーナーウィンドウは方立なしで建て付けられ、開かれると内部と外部が解け合うような不思議な空間を現象させるのである。この窓は落水荘 (1935) をはじめ以降のユーソニアン・



ハウスに度々採用される。 図 6 ウィリー邸

独特な幾何学図像を打ち抜いたパネルの初出はマンソン邸 (1938) と思われるが、以後多くのユーソニアン・ハウスに採用される。通常は通風／換気／彩光のための高窓になるが、ポープ邸 (1939) や今回調査したアフレック邸 (1940) では、寝室の窓にも採用されている。



図 7 ユーソニアン・ハウスの打ち抜き板

穴開きコンクリートブロックの窓は、今回調査したジーマン邸 (1950) やパーマー邸 (1950) のように、煉瓦造壁に組み込まれて用いられた。またコンクリートブロック・ハウスの発展である「ユーソニアン・オートマティック」では、今回調査したターケル邸 (1954) のように、枠だけ残した中空コンクリートブロックが、窓とも壁ともつかぬスクリーンを構成する。



図 8 ユーソニアン・ハウスの窓

以上のような特徴的な窓以外は、ユーソニアン・ハウスの大部分の窓は板ガラスである。「箱の解体」コンセプトとして言われるごとく、「箱に開けた穴」としての開口（垂壁腰壁両付き）はほとんどなく、天井から床まで、天井から腰壁まで、という窓がほとんどである。ウォルター邸 (1945) の居間は高窓とトップライトを持ち、中央に配された水盤から蔦が伸びて住宅内部に広がり、「ガーデン・ルーム」と名付けられている。ジーマン邸の居間も同様に「ガーデン・ルーム」と称され、庭側の窓の下部は室内側に植栽を設けて庭と連続することが意図され、

上部はテラスの軒裏と連続している。一方庭の反対側はコンクリートブロックに穿たれた、深さのある窓である。

以上の窓の調査及び分析を踏まえ、ライトの窓の変容の意味を、かれの建築思想の変容との関わり、及び住宅の全体構成の変容との関わりから、考察したい。

アートガラスの消滅と様式化概念の放棄

プレイリー・ハウスの特徴であったアートガラス「ライト・スクリーン」は、なぜ用いられなくなったのであろうか。1928年に、ライトはプレイリー・ハウスに採用されたアートガラスについて次のように語る。『状況に応じて変化しながらも、この資源（訳注：クーンリー・プレイハウスの窓、ダナ邸の漆の木をデザインした窓）は私の作品のほとんど全てに見られるであろう。これは一般的な建物にも採用されているが、通常は過度であるか、様式化が不十分であるかだ。』（②p. 296）ここで言われている「様式化（conventionalization）」という概念に注目したい。ライトのアートガラスが十分な様式化を意図していることが言われている。彼は1908年、建築における様式化概念を次のように語っている。『建物とはその壁に囲まれた内の人間生活の背景あるいは枠組みであり、また外の自然の開花の引き立て役である。それゆえ建築は様式化の最も完全なものである。』（②p. 95）様式化によって、建築は住宅内部の人間の営みの背景、枠組みとなり、また住宅外部の自然の営みに呼応する。「内（within）」と「外（without）」の対比において、建築はその間で両者を繋ぐ役割を担っているのである。

建築の意味を規定するこの「様式化」概念は、しかし、先の1928年の記述以降ほとんど用いられることはなくなる。人間と自然のかかわり合いは彼の建築において終始一貫したテーマであるが、ユーソニアン・ハウ

スの時期になると、両者を結びつける概念は「スタイル」に変わる。『スタイルは今や建物そのものに自然な質である。スタイルは内より発展する。』（③p. 229）と言われる。両概念の違いは何であろうか。端的に言えば、「様式化」概念は「内と外」の関係をいう概念であり、暗黙のうちに自然を「外」として措定しているのに対して、「スタイル」概念は「内」を全ての始まりと捉え、人間も自然も建築も、あらゆるものは「内から外へ（from within outward）」成長すると捉えているのである。

前期において、様式化概念のもとで（外なるものとしての）植物の外形を抽象化したアートガラスは、スタイル概念が主導する後期においては用いられなくなる。しかしアートガラスに託されていた個別性は破棄されることなく打ち抜きパネル窓に託される。『われわれは「キャラクター」という語を「スタイル」と、また「スタイル」という語を「キャラクター」と大きな矛盾なく使っているようだ。キャラクターとは、首尾一貫した外向きの形状をとり、その本性に調和した形態をとる、ある内向きの力の結果である。』『スタイルはキャラクターの結果である。』（②p. 268）と言われている。植物が多様な花を咲かせ、貝殻のどの1つをとっても同じものがないように、内から外へ向かって成長する有機的建築もまた、多様性と個別性を有していなければならないのである。個別性を打ち抜きパネル窓等に託し、ユーソニアン・ハウスの窓の多くは板ガラスとなる。『壁は消え去りつつあるだろう。居住のための洞窟はついに姿を消そうとしている。私の意味する「壁」はもはや箱の側面ではなかった。それは嵐や熱さを防ぐこともでき、それが必要であるときにのみ空間の囲いであつた。しかしそれはまた外側の世界を住宅のなかに引き入れ、住宅の内側を外側へ出させるものでなければならな

【様式 2】

かった。』(③p. 166) 四方を壁で囲まれた「箱」は、方立なしで解放されるコーナーウィンドウや天井から床に達する透明ガラスのフレンチ・ウィンドウ等によって打ち破られ、内部と外部は流動的に繋がってゆく。

開放性と閉鎖性

しかしここで看過してはならないことは、ユーソニアン・ハウスは決して全方位に開かれているわけではないことである。ジーマン邸の居間を例にとれば、庭側の開放性に対して、その反対側はレンガ造壁で、そこに窓の穿たれたコンクリートブロックの列があり、上方天井面と壁面の隙間に透明ガラスが入っている。完全に閉じているわけではないが明らかに閉鎖的である。この閉鎖性が庭側の開放性を対比的に強めている。閉鎖側はエントランス側であるから、住人は外部から閉鎖性を経て庭側に解放されるのである。この構成は基本的に全てのユーソニアン・ハウスに当てはまる。

機能と方位

ジェイコブズ第2邸(1944)は住宅の平面形が円弧となる最初のものである。ここでもやはり、北側の閉鎖に対する南側の開放が対比的な関係にある。大きなガラス壁面で2層吹き抜けを南側に開放することで太陽の運行に応じて1階床板に蓄熱し、北側は盛土で断熱するというパッシブソーラーシステムが取られており、「ソーラーヘミサイクル住宅」と称される。



図9 ジェイコブズ第2邸

ソーラーヘミサイクル住宅はこれ以後十数件実現するが、しかし、このうち居間が南面するものは2件しかない。すなわち、ソー

ラーヘミサイクル住宅においても方位(南面)は絶対ではない。ライトにとって開放は、どこへの開放であろうか。

ユーソニアン・ハウスの窓の意味

今回調査したジョージ・ルイス邸(1952)はソーラーヘミサイクル住宅の1つであるが、居間は北東に開く。平面形は円弧であるが、ジェイコブズ第2邸が凹面であったのに対してここでは凸面としていわば外に迫り出している。その向かう先には森を背景とした庭がある。端的に、この住宅は森としての自然(世界)に開いている。このとき2階高さのガラス壁面はもはや部屋の窓ではなく、住宅全体の窓として、住まうことの全体を自然(世界)に向けて開く窓として、存在論的意味を獲得していると解される。

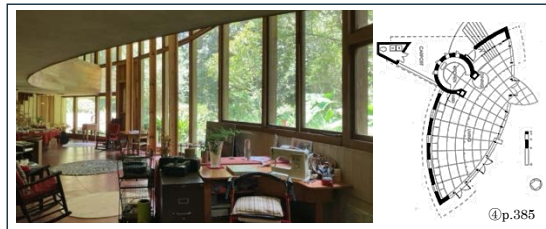


図10 ジョージ・ルイス邸

今回はアーカイブ調査による窓のデータベース制作とターニングポイントとなる住宅作品群の現地調査を行い、建築思想からの窓の意味の検討を行った。今後、さらにプランの変容に引き寄せながら、ライトにおける窓の意味について考察していきたい。

参考文献

- ①Sloan, J. L. and David de Long, *Light Screens: the leaded glass of Frank Lloyd Wright*, Rizzoli, 2001.
- ②Pfeiffer, B. B. ed., *Frank Lloyd Wright collected writings, Vol. 1*, Rizzoli, 1992.
- ③Wright, F. L., *An Autobiography*, Horizon Press, 1977.
- ④Storrer, W. A., *A Frank Lloyd Wright companion*. University of Chicago Press, 1993